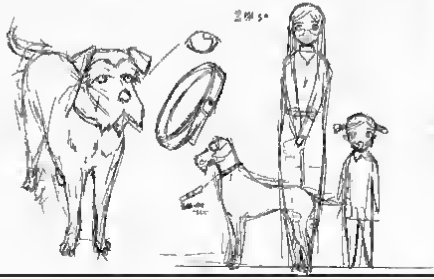
ゲストキャラ PART2

命のジイ（第7話）

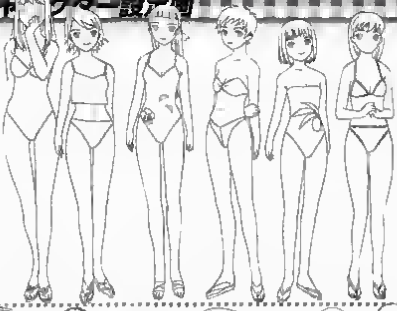
宗像陣（第6話）

不良（第7話）

高野先生（第7話）

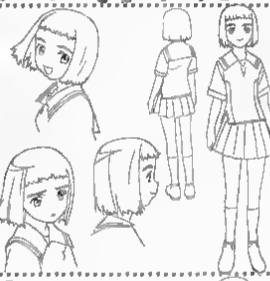


デュランII世（第7話）

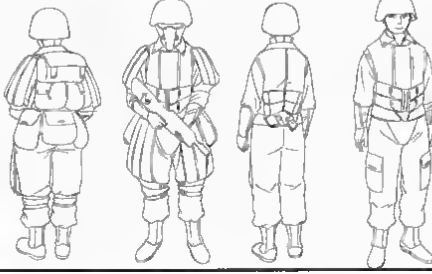


■静留のとりまきの女子生徒たち（第9話）

■スズキ医師（第14話）



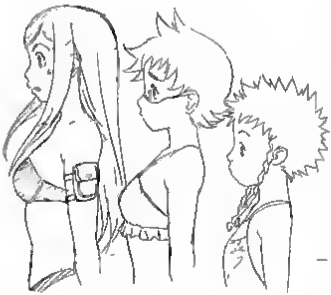
■野々宮清音（第11話）

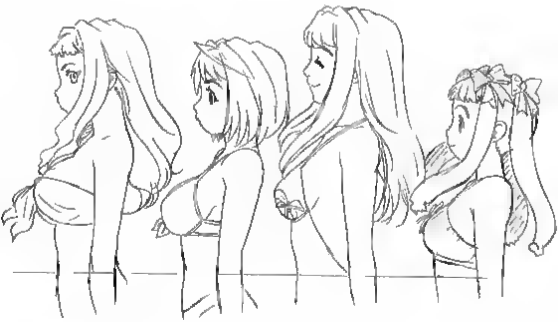


■シアーズ軍兵士（第14話）

主要キャラ身長対比図

バスト対比図





準備稿シナリオ（第1話）特別公開！

「舞-HiME」に限ったことではないが、アニメはその制作過程において、さまざまな試行錯誤が繰り返される。ここで紹介するのは、比較的初期の段階で執筆された第1話シナリオの準備稿である。執筆者である吉野弘幸氏の脚注コメントとあわせ、特別に公開しよう！

◆舞－HiME（仮）◆

#1「ギミトデアッテ」（仮）

（準備稿）【注1】

脚本　吉野弘幸

【CHARACTERS】

鴇羽舞衣
玖我なつき
美袋　命
鴇羽巧海
炎　凪
神崎黎人
椿　祐一
宗像詩帆
風花真白
姫野二三
武田雄巳【注2】
深優・グリーア

舞衣（四歳）
少年（舞衣の記憶の中の）

女子生徒
愛の院の声

脚注執筆・吉野弘幸

【注1】
準備稿というのは企画段階に「こんな感じ？」と試しに書くものです。一年以上前に書いたので本人もほとんど忘れてましたが今見ると結構笑えますね。まぁひとつネタとして楽しんで下さい。ちなみにいまより全体にユルめの話を目指してました。が、気付けば決定稿は船が沈むスペクタクルに（笑）。

【注2】
みんなの名前はほぼ変わってませんが、コイツだけ何かのはずみで変わりました。ちなみに「かつみ」と読みます（あ、思い出したタクミと音が似てるからだ）。なので、本編では「雄士」に。

○舞衣の夢（※全般にイメージ的に）

グスグスと半ベソがきつつ、掌に乗せた二粒のキャンディーを見つめている舞衣（四歳くらい？）。

舞衣（四歳）「また　会える？」

視線を上げると、そこには逆光で顔のよく見えない、四～五歳の少年の姿。

少年「うん。いつか　きっとまた会えるよ。僕のお姫様」【注3】

踵返し、さわやかに走り去る少年。

舞衣、キャンディーをグッと握りしめ、

舞衣（四歳）「きっとだよ、約束だよ――」

と――。

いきなり背後から別の声がして。

青年の声「迎えに来たよ、舞衣」

――となって振り向く舞衣。

その姿は現在（15歳）のものになり。少年の成長したらしい姿の青年が微笑む（顔は見えません）。【注4】

青年の声「やっと会えたね」

その手が伸ばされ、舞衣の両肩にかかる。

舞衣「――！」

頬赤らめ　微かに身体を強張らせる舞衣。

青年の手が舞衣を抱き寄せる。

小さく震えながら、しかし振払せず　そのまま青年の胸に身を任せる舞衣。【注5】

青年の声「もう　離さないよ――」

青年の胸中に手をおそるおそる回す舞衣。

舞衣「うん　　」

ぎゅっと青年を抱きしめる。

巧海の声「離して」

舞衣「え　？」

まだシアワセな顔のまま問う舞衣。

巧海の声「だから離してって！」

舞衣「!?」

巧海の声「離してよ、お姉ちゃん！」

○舞衣の部屋

引っ越しの為　荷物がダンボールにまとめられ、殺風景な部屋。【注6】

バチクリと目を開く舞衣。

舞衣「　ふぇっ！」

舞衣は、寝ぼけて巧海を胸に押しつけ抱きしめている。

頭を引き抜く巧海、ふはぁと深呼吸して。

巧海「死ぬかと思った　　」

【注3】舞衣には、想い出の中のあこがれの少年がいて、いまでもその少年を残しているという設定にしようかという話もあり、それを反映しています。うより幼少乙女度が高いです。キャンディーは、想い出のキーアイテムにしようかな、と。

【注4】さて、その想い出の少年は舞か。　それはヒミツです（笑）。

【注5】今の舞衣なら平手打ちになりますね、多分。

【注6】引っ越し前の、東京の家にいるところから始まっています。

苦しかったのか舞のせいか、顔を赤くしている巧海。
まだ寝ぼけている舞衣、徐々に覚醒し、チロと自分の胸元（ノーブラ）見て。
カッと赤くなると。
舞衣「いやぁあぁあぁ～」
必殺の左ストレートを飛ばす。【注7】が、巧海は、敏捷はされていた枕を拾い、そのパンチをガード。
舞衣「――できるようになったね、巧海」
巧海「何年オトートやってると思ってるの？」
ニンゾンと笑いあう両者。【注8】
舞衣、腕組みして。
舞衣「でもルール違反、勝手に乙女の部屋に入るなって言ってるでしょ、いっつも」
巧海「そりゃ、僕だってベッドに引っ張り込まれて童貞させられかけた上にパンチを飛ばしてくるような『乙女』の部屋に勝手に入ったりしないよ」
鼻先で時計示し。
巧海「――ほっとけば　その自称『乙女』が赤の他人に寝こけた姿を晒しかねないような場合じゃなきゃ、ね」
え、と時計見る舞衣。
ガバッと起きあがって。
舞衣「こうしちゃいらんない～」
部屋のドアに向かってダッシュ。
巧海「あ、待ってってばー　もう――」
追ってくる巧海。
舞衣、その鼻先でドアをバン、と閉める。
ドアに鼻面ぶつける巧海。
舞衣「まだまだだいよ、巧海クン」
べろりと舌を出すと、そのまま廊下に駆け出す。【注9】
舞衣「やっぱ～。せめてシャワーくらい――」
階段を下りつつ、Tシャツ脱ごうとまくり上げる（左の鎖骨のあたりに、奇妙な痣があるのが見える）。【注10】
そして階段をおりきったところで。
引っ越し業者「あ、おはようございま（ぴ）」
荷物を運び始めていた業者にバッタリ。
唖然と見つめる業者。
あわてて駆けよると　ヒク、と引きつる舞衣の顔。
舞衣「キャ～～～～～!!」
舞衣の鉄拳が唸る。【注11】
吹き飛ばされる（ぴ）業者の人。
ドアにぶつけた鼻押さえつつ、階段を追

【注7】
そうそう、舞衣には怒ったり恥ずかしがったりすると、思わずパンチが出る、という設定がありました。

【注8】
巧海も、病気の設定は母にあった筈ですが　今よりかなり元気でナマイキです。

【注9】
舞衣の、巧海の扱い方もかなりぞんざいですね（笑）。
姉弟関係は今よりかなりフレイトな感じです。

【注10】
本編では、詳しい描写はありませんでした。理由は言わずもがなですね。

【注11】
再度鉄拳が唸ってます。
――すげえ暴力女（笑）。

いかけて来ていた巧海、その姿見て。

巧海「あっちゃあ―」

ストレートを出した姿勢のまま、ハァハァと荒い息吐く舞衣。

我に返り、足下に伸びている乗者見て。

舞衣「あ――ごめんなさいごめんなさい」

きゅう、と伸びている業者をガクガクと揺り起こす。

溜息吐き、うなだれる巧海で。

○タイトル

「キミトデアッテ」（仮）

○海沿いの線路

六両編成程度のローカル線が走っている。

舞衣（OFF）「ごちそうさまー」【注12】

○車内

人もまばらな車内（シートはボックス席。その一つに、向かい合って陣取っている舞衣と巧海。

舞衣、立ち上がって窓を開ける（傍らには食べ終わった駅弁。

舞衣「ん～いい風。線路なとこだね」【注13】

駅弁つつきながら、微妙に浮かない顔の巧海。

巧海「ん」

と、風におおられ、舞衣の隣にあった花束（見送りに貰った）が風におおられる。

舞衣「あー」

花束の中にあった写真が、ヒラヒラと舞い落ちて行く。

すんでのところでキャッチする舞衣。

ポラロイドとおぼしき写真には、ホームで撮ったらしい、花束抱えた舞衣、巧海と友達の写真（余白には「元気でやれよ」等のペン書きがあったり）。

懐かしむように見つめる舞衣。

巧海、その表情見て。

巧海「でもさ、ホントに、よかったの？」

舞衣「なにが？」

巧海「転校」

舞衣「まだ言ってる」

巧海「だけど――」

舞衣「いーい。お父さんに世話になったっていう人が理事長で、学費も寮費も出してくれるってのよ？　こんなチャンス、受けない手、ないじゃない」【注14】

【注12】本編では船で来ていますが、このときはまだ電車です。

【注13】あ、初めて決定稿まで残っている台詞が。このあたりの転校に関するくだりは、ほぼ生きてますね。

【注14】本編では、理事長の個人的興味ではなく奨学金を受けて、という設定に変わってます。

巧海「でも　・やっぱり、さ　」
チラと舞衣の手の写真見る巧海。
巧海「その　ごめ―」
舞衣「巧海―」
ビシッと返る舞衣。
おどけた口調になり。
舞衣「びび―。10番　鷺羽巧海選手にファール。ペナルティは　トリ唐皮収―」【注15】
ひょいひょいと指で唐揚げを立て続けにつまみ上げ、自分の口に放り込む舞衣。
巧海「あぁ―　酷いよ、お姉ちゃん―」
舞衣「(ぐっ!?)」
詰まらせ、ドンドンと胸元叩く舞衣。
手が飲み物を求めて彷徨う。
と、横からジュースの缶が差し出され、それをひっつかんでゴクゴクと呑む。
舞衣「ぷはぁ―」
一息つくが、手にしたジュースが自分のでも巧海のものでもないことに気付く。？と横に視線を巡らせると、ポンクス盤に少年が立っている。
舞衣「えっ？　あれ!?」
しげしげとその少年を見る。
舞衣「これ　あなたの　？」
頷く風。【注16】
舞衣「　？　ありが　」
言いつつ、その唇に注目してしまう舞衣。
次いで缶の口を見つめる。
舞衣「　あ　―」
間接キスに思い当たり、ポっと微かに赤くなる舞衣。【注17】
少年、クスリと微笑み。
少年「可愛い人だね　あなた」
次の瞬間、少年がすい、と舞衣にアップで迫ってくる。
舞衣「―」
思わず、身を引く舞衣。
まじまじと見つめる少年。
アップで迫られ、真っ赤になる舞衣。
風「ふうん。キミが、最後のお姫様かぁ　」
線路と平行して走っている道路。
電車を追うように走るバイク。
乗っているのは、制服の少女。【注18】
舞衣「ヒメ　？」
フ、と微笑む風。

【注15】
巧海と舞衣の共通の好物が、トリの唐揚げだったという設定があったようなかったような。

【注16】
いきなり接吻している風。ワケ知り顔の謎の存在なのは今と同じですが　それでもまだこの当時の方がフツーでした。ちゃんと生徒として授業を受けるようなシーンも想定されていたはず。

【注17】
う～む。やはりキスで赤くなるのはこの時からのデフォルトでしたか　もっとも、本舞衣は接手は舘で、間接ではなく直接でしたが。

【注18】
なつきが制服でバイクに乗ってます。はためくスカートで、パンツを見せる気が満々だった頃の話（実。

電車に追いつき、併走するバイク。
窓越しに、互と舞衣たちの姿を認識するなつき。

× × ×

車中の巧海、ふと視線を車窓から外に。と、併走して走っているバイクに気付く。

巧海「 ？」

舞衣、巧海の様子に気付き、外を見やる。こちらを凝視しているなつきと目が合い。

舞衣「 ？」

刹那、交錯する両者の視線。
皿もその姿に気付き、おや、と笑う。
次の瞬間、右手を一ひねりして電車を追い越して行くなつき。

舞衣「なっ―によあれ」
巧海「キレイな人だったね　」【注19】
舞衣、やらしい笑み浮かべ。
舞衣「ほ～ん」
巧海、微かに赤くなって。
巧海「なんだよ『ほ～ん』ってー　――あれ？」
へっ　と横見る舞衣。
少年の姿は忽然と消えている。

首を伸ばし、車内をあちこち見る舞衣。が、少年の姿は無く。
少年の残したジュースの缶を唖然と見つめる舞衣と巧海。

× × ×

線路脇の踏上から、電車を見送っている先ほどの少年。【注20】
ニッと微笑む。

○風華学園前駅

キッと停車するバイク。
ヘルメットを取るライダー。
長い髪がバサリと揺れる。
自分が今来た方向を睨んで見つめるなつき。
徐々に電車が追ってくる。

○ホーム

停車し、まばらに降りる乗客。
ホームに駆け込んできたなつき、周囲に素早く視線を走らせる。
と、降りてくる舞衣たちに気付き。
なつき「ー　そこのー」
へっ　と振り向く舞衣と巧海。
眼前には、鋭い目をしたなつき。

【注19】
巧海がなつきに惚れたりしたら面白いかな　などとも思ってましたね、たしか。

【注20】
やっぱり少年は神出鬼没（笑）。

巧海「あー」
舞衣「あんた　さっきの！」
なつきが巧海にチラと視線を走らせる。
その視線にピクとなる巧海。
なつき「一緒にいたヤツは!?」【注21】
舞衣「一緒に　って　あの――!?」
なつき、舞衣の襟元をグッと掴み上げる。
なつき、舞衣にキスもせんばかりに顔を近づける。
なつきの、声ひそめ。
なつき「あなたも『一番地』の人間なの!?」【注22】
睨む目の色が微かに変わる（力の発動の前兆）。【注23】
息を呑む舞衣。
と、掴み上げた襟元が開き、痣が覗く。
刹那、！　となるなつき。
なつき「――そう。あなたも――なのね」
被って、発車を告げるベル。
舞衣「え?」
ドアが閉まり、走り出す電車。
巻き起こした風が、なつきの黒髪を靡る。
なつき「なにを自当てにここに来たのかは知らないけど、せいぜい、気をつけるのね」
舞衣「――?」
なつき「甘い気持ちでいると――死ぬわよ」【注24】
舞衣「し　!?」
たじろぐ舞衣を無視して踵を返すなつき。
あらためてホームを見渡す。
なつき（呟く）「逃げ足の速い――」
カツカツと歩み去って行く。
唖然としていた舞衣、ハッと我に返り。
舞衣「ちょっとォ！　勝手にワケわかんないこと言って！　人違いなら一言くらいあやまんなさいよ！」
無視して歩み去るなつき。
舞衣「なによ！　このバカ～～～～!!」
×　×　×
舞衣と巧海、改札を抜けつつ。
舞衣「も～！　なんなのよアレ!?　今度会ったらキッチリ懲らせてやる！」
プチプチと早口でまくし立てている舞衣。
巧海（呟く）「つまんないとこだけガンこなんだから――」
はぁ、と溜息吐く巧海。
舞衣「何？」

【注21】なつきと舞衣の出会いはやはり暴力的がアグレシブ感。とにかく、「友好的ではない」出会いをしてほしかったんですね。

【注22】はい。この準備稿、最大の笑いどころです。いや～、忘れてて自分でも爆笑しました。女番業を嘆るなつき　似合わねぇ～。いま見ると、なんだかおカマさんのようです。

【注23】そんな設定があったのか（笑）。

【注24】この台詞も本編まで生き残りましたね。もっとも、本編の、バトルの後、洗みかけの船で発せられたものとはかなりリアリティが異なりますが（笑）。

巧海「お互いのためには、もう二度と会わないといいなって話」

舞衣「それは無い。多分」

駅舎を出ると、明るい日差しが差し込んでくる。

舞衣「だってあの制服、ここのでしょ」

目前に広がる、緑豊かな山の麓と斜面に広がる広大な学園を見つめる二人。【注25】

舞衣「――この、風華学園の――」

学園のチャイムが鳴り、山間に響する。

× × ×

その姿を、路肩に停めた車の車内から見つめる人影。【注26】

カーナビ様のモニタには、舞衣の顔写真とデータが映し出されている。

○学園全景

放課後なのか、雑然と歩き回っている生徒たちの姿。

正門近くでは、小 中 高入り乱れ、様々な年頃の少年少女がいる。

× × ×

弓道場では、放たれた矢がスパンと図星を貫く（射ているのはあかね。【注27】

× × ×

小体育館では、フェンサー（剣士）が対戦相手（雪之丞）から有効打突を取る。【注28】

× × × ×

美術室では、石上が生徒たちに絵の指導をしている。【注29】

× × ×

そして、学園の片隅にある、茶室らしい和風の小さな建物では――。

○茶室

ピンと背筋を伸ばし、澄ました顔で軽やかにお茶を点てている詩帆。【注30】

詩帆「いくら幽霊部員でも、そろそろ手順くらい覚えないと除籍にされちゃうよ」

祐一「ん」

茶を崩したまま、気のない返事の祐一。

詩帆、手を止めて。

詩帆「聞いてる？　お兄ちゃん！」

祐一「聞いてるよ」

ムソと口を尖らす詩帆。

詩帆「も～～」

【注25】
学園のロケーションがいまと微妙に違いますね。学園の麓の街と駅前はこの当時、かなり小規模なものとして想定されてました。

【注26】
本編より、風分と勤勉な一番地の黒服たち。

【注27、28】
本編では全裸離れられず、また、エレメントとの絡みもあって、装活の設定は結局なかったことになってしまいました。

【注29】
雌一、石上が美術部の顧問をしているのだけは同じですね。

【注30】
そして、茶道部の良帆と祐一。祐一はまた生徒会の下僕ではなく、茶道部の幽霊部員でした。

祐一　苦笑いしつつ。
祐一「　書いな、迷惑かけて」
えっ？　と驚く詩帆。
赤くなって。
詩帆「べつに、迷惑だなんて　。あたしはお兄ちゃんといられて、そのごによ」
（ごによクス、と見守る祐一。

○校内・前庭

生徒が行き交う本館正面の庭に来ている舞衣と巧海。【注31】

舞衣「しっかし　広いとは聞いてたけど」
巧海「うん　。小　中　高　全部この敷地にあるみたいだね」
傍らを通り過ぎる小学生を見ながら言う巧海。
巧海「で、僕らがまず目指すのは？」
手紙を取り出す舞衣。
差出人の名は「星花真日」。
舞衣「とりあえず、理事長室。父さんの友達だったっていう理事長さんにご挨拶」
と、その様を深優かとおりかかる。

舞衣「あ、すみません！」
脚を停め、振り向く深優。
深優「　」【注32】
×　×　×
庭の片隅で女子生徒に囲まれている黎人。
女子生徒「――そうそう、F組の娘が」
女子生徒「なんか黒いので、影がそのまま出てきたみたいなヤツだって」【注33】
黎人「ありがとう。参考になったよ。　またなにか尊を聞いたら、ヘンに広めたりしないで生徒会に、ね」
女子生徒「嬉しそうに。
女子生徒「はいー　神崎先輩ー」
と、黎人、ん？　と首を巡らせる。
その視線の先には、舞衣。
×　×　×
舞衣「あの、理事長室ってどこだか教えて頂けませんか？」
深優「無表情のままで。
深優「　方位1―7―3、仰角17度、距離1024メートル」【注34】
舞衣「　は？」
言うだけ言うと、スタスタと歩き去って行く深優。

【注31】
このころはまだ学園のキービジュアルとなる水晶宮の設定は無かったはず。

【注32】
いきなり登場の深優。本編では二人の会話は5話が初めてだったというのに。

【注33】
オーファンの存在の裏わせですね。もっとも、この当時はまだオーファンとは呼ばれていませんでしたが。何と呼ばれていたかは、^{ページ}57を参照のこと。

【注34】
やっぱり受け答えがロボな深優。この娘に関しては、ベースの設定はほとんど変わっていません。

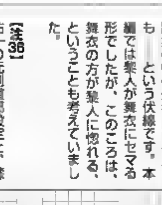
唐突と見返る舞衣。
と、背後から声。
黎人「迷ってるのかなっ」
　となる舞衣。
　刹那、フラッシュする四歳の頃の記憶。
少年の声「迷ってるの？」【注35】
　バッと振り向く舞衣。
　記憶の少年の姿が刹那、その人影にダブり。
舞衣「あ　」
黎人「探してるのは、理事長室？」
　微笑む黎人。
　呆けたように見つめる舞衣。
　？　と見る巧海。

○茶室
　茶碗置き、会釈する祐一と詩帆。
　と　祐一、すぐに崩し。
祐一「だ～～～。なんだってお茶呑むのにこんなにいろいろあるんだよ？」
詩帆「茶道たもん」
祐一「む～～～」
　詩帆、僅かに逡巡してから。
詩帆「ね　お兄ちゃん」

祐一「ん？」
詩帆「一緒にいられるのは嬉しいんだけど　でも　やっぱりあたし　刹道やってるお兄ちゃんの方が好　似合ってたと、思うな」【注36】
祐一「詩帆　」
　と、茶室の外から声。
武田（ＯＦＦ）「その通り！」
　ブソと茶を吹き出す祐一。
詩帆「きゃあっ」
　茶室の引き戸が震いて。
武田「宗像の言うとおりだ！　お前に茶道など似合わんぞ　場!!」
　闘着姿の武田。
祐一「武田先輩　!?」
　引き戸閉め　その前に立ちふさがるように陣取り。
武田（ＯＦＦ）「今日こそは逃がさんからな！　部に戻ると言うまで俺はここを動かんぞ！」
　あっちゃ～と見る祐一。
　×　×　×
　戸口の前に舞取り、背後の茶室に大声で話しかけている武田。

【注35】
記憶の中の少年が、黎人かも　という伏線です。本編では黎人が舞衣にセマる形でしたが、このころは、舞衣の方が黎人に惚れる、ということも考えていました。

【注36】
祐一の元剣道部設定と、膝を壊してリタイアしたことなどは本編そのままです。が、積く武田の登場とセリフもあり、本編より随分わかりやすくなってましたね（笑）。



武田「――いいか、橋。確かに、怪我で全国大会に出られなかったのはショックだったろう。だが、お前の力なら多少のブランクなぞ問題じゃない。今からでも――」

詩帆（OFF）「きゃあー　何するの!?　お兄ちゃん!?」

――となる武田。

詩帆（OFF）「お兄ちゃん――いや、やめて！　――そんな――」

詩帆の声、徐々に聴きが遠じり。

詩帆（OFF）「ああっ　そんなの　だめえっ――あ――イヤ――」【注37】

武田「橋――!!　血迷ったかぁ～～!!」

ガッと茶室の扉開く武田。

その瞬間、武田の目に、抹茶の粉末が吹きつけられる。

武田「ぐわっ――」

目つぶしを喰い、たじろぐ武田。

祐一、顔を真っ赤にしている詩帆に。

祐一「素晴らしい感激、詩帆！」

詩帆「ばかぁっ」

武田「橋、貴様――!!」

祐一「っと――」

武田を殴し、茶室の戸をくぐり抜ける祐一。【注38】

脱兎のごとく逃げてゆく。

武田、負った赤な目でそれを睨み。

武田「たぁ～てぇ～!!」

○学園内

理事長室が望める場所まで来ている黎人、舞衣、巧海。

黎人「――あれが　理事長室。っていうより、理事長のお宅なんだけどね。そこの角を曲がれば、あとは道なりでわかると思うよ」

舞衣、微かに頬染め、ぺこりと頭下げる。

舞衣「ありがとうございます」

黎人「どういたしまして。――ところで　理事長本人に会ったことは？」

舞衣「いえ、初めてお目にかかるんです」

黎人、クスリと笑って。

黎人「――なら、きっと驚くと思うよ」

舞衣「驚く　？」

黎人「覚悟しておいた方がいいかもね

黎人「じゃあ」
舞衣、勢いに口をついて出るように。
舞衣「あー」
黎人「？」
舞衣「あの、あたし――舞衣って言います。高校一年です」
黎人「僕は神崎黎人。高等部三年です」
微笑む黎人。
舞衣「じゃあ、またね、舞衣さん」
黎人「はい！」
去って行く黎人。
ほう、と溜息で見送る舞衣。【注40】
巧海「ほーん」
と振り向く舞衣。
巧海「お返し」
ベロリと舌出す巧海。
舞衣「んもう！」
照れつつ笑顔で言う舞衣。
× × ×
逃げている祐一。
追ってくる武田。
武田「その根性、鍛え直してくれる!!」
祐一「よけいなお世話ですよ！」
そして、角にさしかかり――。
曲がった途端、立っていた舞衣が目前に。
祐一「いっ!!」
激突する両者。【注41】
舞衣「きゃあっ！」
祐一「うわっ！」
宙を舞うバッグと花束。
ドサリと倒れる舞衣と祐一。
祐一「つー」
手をついて、身を起こす祐一。
その手の感触に？となる。
祐一「……ふに？」
舞衣を押し倒すような格好で倒れ、胸の上に手をついている。【注42】
祐一「……何となく反射的にふにふにとその胸揉んで。
祐一「……大目に見てC」【注43】
視線が合う両者。
舞衣「いー」
カァアノと真っ赤になる舞衣。
舞衣「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
必殺の左ストレートが唸る。【注44】
ハデな打撃音して――。
祐一「ぐ　グーで殴るか、フツー」
パタリと倒れる祐一。

【注40】すでに一話で"乙女入って"る舞衣。ここも笑いどころでしょう。

【注41】倒れ角でぶつかる。ベタです。ベタすぎです。まぁ、そもそもそれを狙ってやってたんですが（笑）。

【注42】これもお約束。本編では結局、舞で無理矢理形で生き残りました。

【注43】衝撃の事実――というほどでもないですが、実は舞衣の巨乳設定が、このころはありませんでした。いや～、すっかり忘れてて、自分でもビックリ。今や舞衣イコール乳、ですもんね（笑）。

【注44】3発目。

○鷹花邸への道のり

えっちらおっちら坂を上る舞衣と巧海。

巧海「――大丈夫かな、あの人」

× × ×

無言の仏像で、武田に引きずられて行く青タンを作った祐一。

舞衣（OFF）「知らないわよあんなヘンタイ　もう、なにが――」

× × ×

自分の髪に手をやる舞衣。

舞衣（呟く）「大目に見なくても――ちゃんとあるわよ　――【注45】

が、すぐにブンブンと首を振って。

舞衣「――ああもう！　せっかくいい気分だったのに！」

巧海「――なんか、初日からいろいろありすぎな感じだね」

ふう、と息吐きつつ言う巧海。

舞衣、少し心配顔になり。

舞衣「――疲れた？　荷物、持とうか？」

巧海、笑顔つくり。

巧海「大丈夫だよ」

舞衣「よし、じゃあと少し、がんばろう。

とにかく、理事長ドノに会えば本日の予定は終了なんだから」

巧海「――そう言えば、神繁さん、だっけ。驚くって言ってたけど　――」

舞衣「これだけいろいろあったんだもん。もう多少のことじゃ驚かない――」

○鳳花邸

ビックリ顔の舞衣。

玄関から顔を出した、メイド姿の二三が、ホンワリと盛笑む。

二三「遠羽舞衣さんと、弟の巧海さんですね。理事長がお待ちですわ」

○廊・舞下

二三に先導され、廊下を進む舞衣と巧海。その後ろ姿見つつ、舞衣。

舞衣（ヒソヒソ）「――信じられる!?　メイドさんよ、メイドさん！」

巧海（ヒソヒソ）「伝説上の生き物かと思ってた――」【注46】

舞衣（ヒソヒソ）「確かに、これは今日一番のオドロキ――」

【注45】
胸のサイズを気にする舞衣が妙に新鮮。本編では、このテのことはなつきの仕事になりました（笑）。

【注46】
このツッコミは本編二話の決定稿まで生き残ったのですが、コンテの段階で、尺の都合でカットとなりました。二三の雰囲気は、今とほとんどかわりませんね。

○同・理事長室
　再度、目が点になっている真衣。
　目の前にいるのは、車椅子に乗った少女。
　微笑んで。
真白「初めまして。私が、この風華学真の理事長、風花真白です」【注47】
　オドロキっぱなしの真衣。
巧海「お姉ちゃん」
　真衣を小突く巧海。
真白「どうかなさいましたか？」
　真衣、ようやく我に返り。
舞衣「あの、あなたが、父の友人の――？」
真白「はい。あなた方のお父様には親しくしていただいて――大変お世話になりました」
真衣「えと、それはどういう――？」
　真白、ふっと夢見るような笑顔で。
真白「それはもう、一言では語り尽くせないほどですわ。――よろしかったら、時真のあるときに遊びに来てくださいな。お父様の思い出、いろいろ聞かせて頂きたいわ。私もお話しして差し上げたいし」【注48】
真衣「（感ん）」「なんか聞くのがコワいわ――」
真白「？」
舞衣「え、ええ、是非。伺わせていただきます。――いつか」
真白「お待ちしております」
　微笑む真白。
真衣「とにかく、その――。この学園に招いて頂いて、本当に、ありがとうございます」
　真衣を下げる真衣と巧海。
真白「――お気になさらないで。私があの方から頂いたものは、この程度では お返し出来ない程ですから――」【注49】
真衣「はぁ――」
　と、ノンクの音。
　二三、顔を覗かせ。
二三「真白様。雪里の方々――シスター紫子と追水先生に連絡が取れました」【注50】
真白「ありがとう、二三さん。――ではお疲れでしょう　今日はお休み頂いた方がよろしいですわね」
真衣「そうして頂けると――」
真白「見えますか？　あちらが男子寮で――向こうが女子寮になります」
　窓から、寮を指し示す真白。
　寮は学園の敷地のそれぞれ両端に建っているのがわかる。
二三「真白様。あのことについて、お伝えしま

【注47】「車椅子でメイドを従えた美少女理事長」のコンセプトは、設初期に決まってそのまま生き残った設定の一つです。もっとも、真白自身は本編よりもう少し活発な――というか、お茶目な雰囲気が強いのですが。

【注48】舞衣の父親が考古学の教授が何かで、その関係で真白と知り合いだった――というような設定を考えていたようなないなかったような。

【注49】11綴の美少女理事長に何をやったんだ　舞衣の父。

【注50】紫子と追水が寮の舎監をやっていて、門限や消灯時間がキビしい――というような設定もありました。本編ではかなりイージーな寮になってますが。

ておいたほうがよろしいのでは？」
舞白「ぱちん、と両手打ち合わせ。
舞白「いけない！　そうね」
舞衣「……？」
舞白「あの、とっても言いにくいことなんですけれど。最近、学園内で妙な出来事が多いんですの」
舞白「言葉を切って。
舞白「なんでも、お化けを見たとか、それに憑かれたとか――。舞体的な被害者は出ていないので、よくある学校の怪談というのだとは思うんですけれど――なにぶん、数が多くて」
舞衣「お化け……？」
キョトン、と見る舞衣と巧海。
舞白「本当にいたら楽しいんじゃないかと私は思うのですけれど。とにかく、そういうことですので、注意なさって下さいね」
微笑む舞白。【注51】

○山の麓の分かれ道

舞衣「なんつー……」
巧海「いろいろインパクトありすぎだね」
舞衣「あたしたち、ひょっとしてとんでもないところに来たら」
巧海「……かも」
言葉にならない笑わずにいられない二人。
巧海「でも、楽しそうじゃない？　なんか」
舞衣「……だね」
校舎を見つめる舞衣と巧海。
夕日であかね色に染まっている。
舞衣「……ん。――がんばろ、巧海」
巧海「うん」
追水の後を追う巧海。
僅かに寂しげな顔で、その後ろ姿を見つめる舞衣。
やがて踵を返し、歩き出すと、ずっと持っていた花束をしげしげと見る。
舞衣「ちょっと元気ないかな？　早く、あげてあげなきゃ」
脳裏にフラッシュする、見送ってくれた友達の姿。
花束抱きしめるように抱える舞衣。
と、そのとき、ガサリと物音。
！　となって振り向く舞衣。
が、何もいない。
「コツリと自分の頭を叩いて。

【注51】本編とはまた別のベクトルで人の悪い舞白。あえて言えば、暴露版に近いでしょうか。

舞衣「なに真に受けてるのよ、あんな話――」
と、いきなり視界が展け。
目の前に広がるのは、旧校舎（？）の廃墟。
舞衣「――!?」
×　×　×
森の中の影。
小さなシルエット（舞）。【注52】
目が、赤く輝いている。

○遍花郎
舞白「近道は、ちゃんと教えて差し上げたっ」
二三二、ホンワカと微笑み。
二三二「お言いつけどおりに」
舞白「そう――」
惑わされ舌に染まる学園を見つめる舞白。
×　×　×
その屋根の上に立っている凪。【注53】
凪「遅刻が刻――」
導かれるように廃墟に脚を踏み入れ、あたりを見つめる舞衣。
×　×　×
凪（OFF）「魔の者達が好む刻――」

×　×　×
森の中を、あちこちに視線走らせ、警戒しつつ進むなつき。
×　×　×
凪「遅の羽色に染まった世界よ、舞衣姫――」【注54】
キミの色た
微笑む凪。

○廃墟
舞衣「何　ここ　？」
と、視界に何かが映り。
――と見つめる舞衣。
廃墟に一人の女性が座っている。【注55】
舞衣「!?」
薄ぼんやりと白く燐光を放つその姿。
悲しげに見えるその表情。
と、彼女の指先が舞衣の背後を示す。
舞衣「――!!」
振り向くと、大きな影。
そこに、巨大な影が落ちている。
舞衣「――えっ」
その影が揺らめいたように見える。
目をこする舞衣。
が、影は確かに動いていて――。

【注52】ここでようやく命の初登場。舞衣との出会いは一二三以降に想定されていました。やっぱり、ドザエモンに比べるとかなりインパクトに欠けますね（笑）。

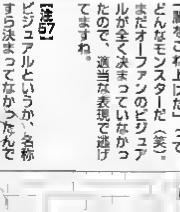
【注53】やはり高いところ好きの凪。ここからのぞくたりは、雰囲気のみ本編二話Bパートに活かされています。

【注54】「遅羽色」というのはピンクに近い色なので遅刻に言うと違いますけどね。名字に何か意味を持たせようとまた頑張っていたことが窺えます（笑）。

【注55】誰なんでしょう（笑）。本編では凪が説明役でしたが、こんな絵を出して説明をさせようかとも考えていました。

舞衣「何――これ　？」
みるみる、影は立体感を持って湧き上がってくる。
舞衣「――！」
目を見開く舞衣。
恐怖にかられ、振り向くとそこには先ほどの女性の姿はない。
背後では、確かに何かの気配。
おそるおそる目だけ動かすと――。
何か黒く尖ったモノの先端が見える。
舞衣「――――！」
その腕らしきものが振り上げられ――。
バッと振り下ろされる。
同時に、目の端で捕らえていた舞衣、つんのめるように飛び逃げて、なんとかその一撃を躱す。
が、一転んでしまい。
まじまじとモンスターを見ることに。
舞衣「あ　あ　」
闇をこね上げたようなモンスター。
【注56】
その不気味な姿。
再度、腕が振り上げられ――。

舞衣「いやぁぁっ」
頭を抱えるように身を縮こまらせる舞衣。
ギリギリで舞衣をかすめるモンスターの爪。
尻餅ついたまま、ズリズリと後ずさる舞衣。背後には壁。
追いつめるように前進してくるモンスター。
×　×　×
なつき「――――オーグ　――！」【注57】
木々の切れ目から、廃墟を見つめるなつき。
×　×　×
舞衣の背中が、壁に当たる。
舞衣「――――！」
怯える様に見つめる舞衣。
と、その目の前で、花束がモンスターに踏みにじられる。
舞衣「あ　――！」
その刹那、舞衣の目に光が戻り。
舞衣「なによ　あんた　――！」
ギリと歯軋みする。
舞衣「なんなのよぉ――」
三度、モンスターの攻撃。



【注56】
「闇をこね上げた」って、どんなモンスターだ（笑）。まだオーファンのビジュアルが全く決まっていなかったので、適当な表現で逃げてますね。

【注57】
ビジュアルというか、名称すら決まってなかったんですね。この当時は、ストレートにオーグ（鬼）と呼ばれてました。

今度は意志を持って躱すと、立ち上がり。
舞衣「もうサイテーよ！　こんなの！　なによ！　ばかぁっ!!」
羞恥ませつつ、悪態をまき散らしながら、持っていたバッグを滅茶苦茶に振り回してなんとか応戦する舞衣。
×　×　×
なつき「無茶苦茶よ……。まだ目醒めてないの？　あの娘――」
舌打ちするなつき。
×　×　×
舞衣「あ　ー」
バッグがはじき飛ばされる。
そして、追いつめられる舞衣。
睨み対する、舞衣とモンスター。
舞衣の鼓動が高まる。
心臓の音が、徐々に高鳴って行く。
服の下で、痣の紋章がぼんやりと輝き始める。
舞衣「あ　ああ　」
高鳴る心臓の音。
迫るモンスター。
見開かれる舞衣の瞳。
と、そのとき――。

命「鬼無（きな）の太刀よ！」【注58】
叫ぶ声。
ー　と見る舞衣。
廃墟の瞳（ひ）の上に立った、セーラー服のシルエット。
その頭上に、文様の光が浮かび上がり、その中からゆるりと太刀が落ちてくる。
×　×　×
なつき「H－MEI？　あの娘も!?」
×　×　×
その太刀掴むと、斜め正眼に構える命。
命「はあぁぁぁぁっ」
ジャンプ一番　笹下しつつ、頭上からモンスターを縦にまっぷたつに切り下ろす命。
舞衣「――!!」
命「迷い出でし者よ、無へと還れ――」
【注59】
見つめる舞衣。
消えて行く　両断されたモンスター。
そして、静かに振り向く命。
舞衣「あ　なた　!?」
その瞳光は絶いままで、舞衣を脱み付け

【注58】
ミロクもやはり名前が変わってます。で、ようやく命の活躍、と。このあたりは本編二話の出方に活かされていますね。ちなみに、まだこのころはミロクが収納（?）可能でした。

【注59】
キメ台詞も付けたいなぁとか考えてましたね、このころは。ちなみに命は、いまよりかなりカッコイイ（?）――というか、キリリとした印象があります。

【注60】（160ページ）
命がH－MEIの力を使うと、消耗して倒れてしまう、という設定です。それがいつしか、ハラペコだと倒れるという話に（笑）。

る。
息を呑む舞衣。
が、次の瞬間、フラリとよろめく命。
舞衣「えっ!?」
慌てて手を差し伸べる舞衣。
その腕の中に倒れ込む命。【注60】
舞衣「ちょ、ちょっと、あなた、ねえ!?」
呼びかけるが、命は気を失っている。と、舞衣の目の前で、モンスターと同じように、太刀が消えて行く。
舞衣「……」　×　×　×
なつき「……」
フ、と笑って、踵を返す。
×　×　×
舞衣「あの……もしもし!?　もしもーし!?」
が、命は踵を解けない。
気付けば、あたりは薄暗くなっている。
が、先ほどまでの奇妙な様子はなく、あたりはただ鳳藻の山を覆うのみ。
舞衣「なによこれ……なんなのよぉ～～～～～!!」
命を抱えたまま、遠方に響れて叫ぶ舞衣。

○奥の院【注62】
その姿が、モニタ画面になり。
声「最後のH－MEが舞台に立ちました。早くも、オークに凌駕した模様です」
声「いよいよ、ですな……」
声「今度こそ、しくじりは許されませんぞ」
声「うむ」
声「では、よろしいですかな?」
一瞬の沈黙。
声「これより、プロジェ「H（アッシュ）」ファイナルフェイズを開始する……」
【注63】

《第一話　了》

【注61】やっぱりわからず叫ぶ舞衣」がオチ。ちなみに「はい～?」の口癖はまだありません。というか決定稿の一話を書いてラストにあのセリフを持ってきたとき、初めて舞衣の口癖になったような気がします。

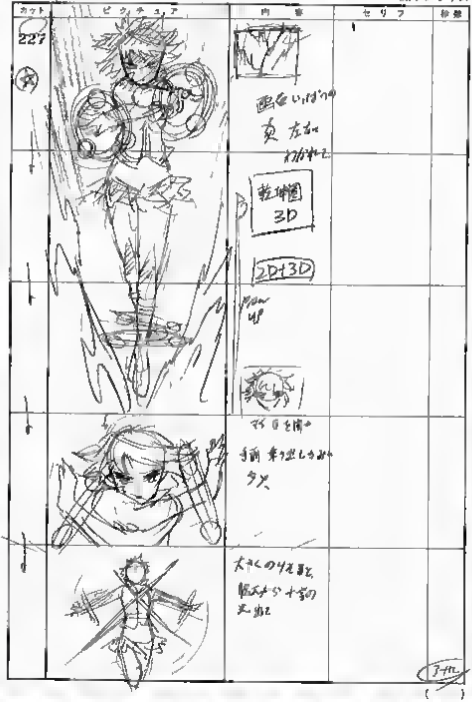
【注62】一番地の会議室みたいなものでしょうか。場所が学園の地下かどうかは定かではありませんが、イメージ的には黒幕宮に近いです。

【注63】なぜかフランス語。素直に「えっちけいかく」と言えばいいのに（笑）。ちなみに、「H」はH－MEの頭文字であり、けっしてスケベのHではありません。念のため。

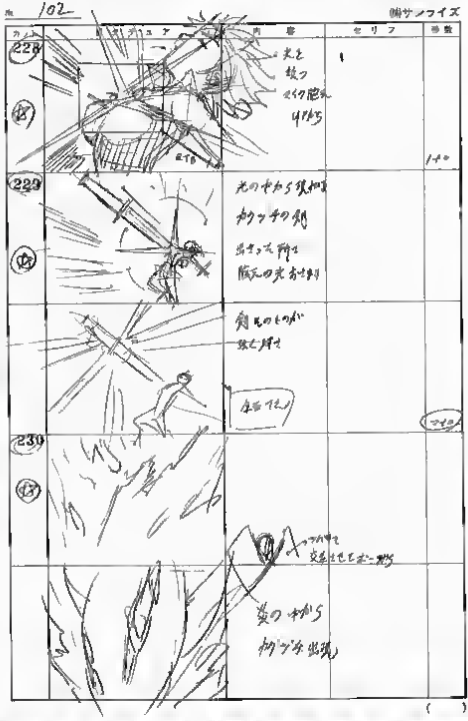
絵コンテ公開

キャラデザインとともにアニメーションディレクターも担当された久行宏和氏が、自ら描いた絵コンテの一部を紹介！

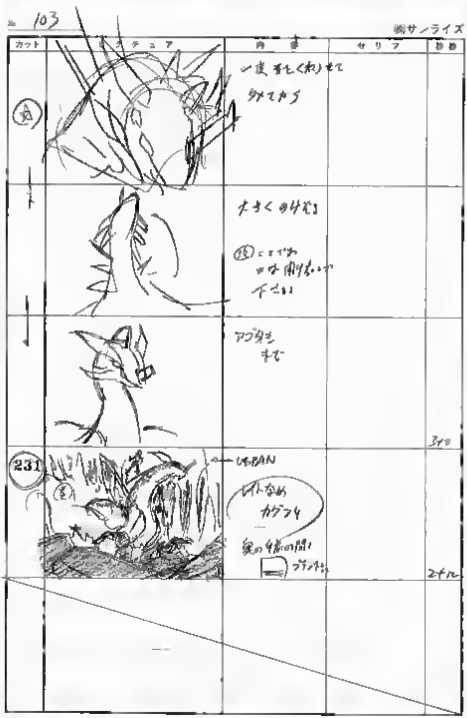
カグツチ召喚シーン①



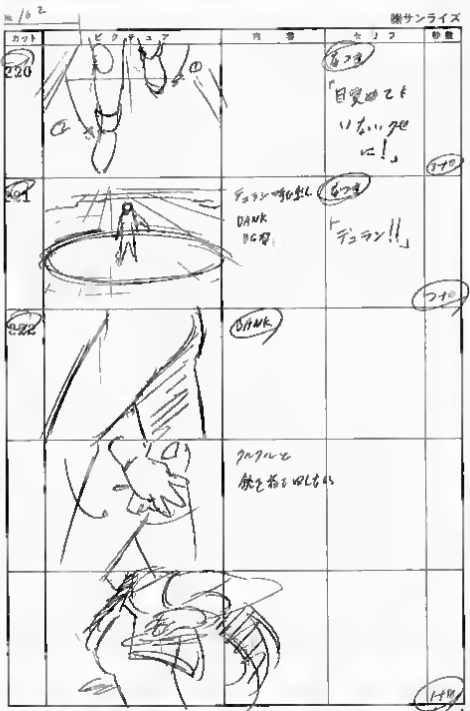
カグツチ召喚シーン②


102
サンライズ
カット
内容
セリフ
秒数
228
光を
放つ
229
光の中から現れる
カグツチの剣
230
炎の中から
カグツチ出現

カグツチ召喚シーン③

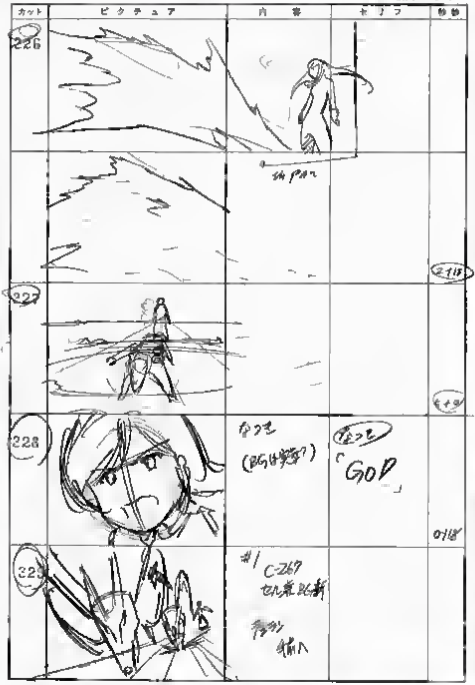

103
©サンライズ
カット
ビジュアル
内容
セリフ
時間
大きくのけぞる
アゴタニ
キて
231
UCHAN
ハトなめ
カグツチ
奥の4体の間
フヴントン
2カット

デュラン召喚シーン①


㈱サンライズ
カット
ピクチュア
内容
セリフ
秒数
220
「目覚めてもいないクセに！」
デュラン召喚
DARK
「デュラン!!」
DARK
クルクルと
炎を巻き
ON
OFF

デュラン召喚シーン②

デュラン召喚シーン③



※カット328～329は小原監督が執筆されたものです。

愕天王召喚シーン①

136
㈱サンライズ
カット
ピクチュア
内容
セリフ
秒数
ガッと引いて
ミドリ 乗り出して 叫ぶ
オノを回転させ 右から 大きく 振り下ろす
ガク・テン・オ〜〜
(376)
640
( )